

第2版の序

初版の発行から16年が経ち、この間にCT、MRIの撮像技術の進歩、PET/CTの普及など、画像診断において大きな変化があった。HPV (human papillomavirus) やEBV (Epstein-Barr virus) の頭頸部癌への関与が明らかになり、遺伝子診断が進んだ。頭頸部領域でも疾患概念の変化が起こり、また病期分類の改訂が行われた。

このような流れに対応すべく、刊行以来、好評をいただいていた『画像診断別冊 KEY BOOK シリーズ 頭頸部の画像診断』を全面改訂することとなった。初版出版時には頭頸部の教科書は少なかったが、近年、国内外で様々な頭頸部画像診断の教科書が出版され、さらに最近はWebベースのものも増えている。そのように時は流れても、正確な局所解剖の理解を基本とする頭頸部画像診断の本質は変わらない。しかし、撮像技術の進歩によって、より有用な画像が得られるようになった現在、その恩恵を最大に活用すべく画像診断を進めていくことが一層重要となった。医療や学問に近道はないが、情報量が膨大な今日においては効率の良い学習が求められる。この改訂第2版でも初版と同様、読者が頭頸部画像診断をより身近なものに感じられるよう、そして苦手科目を得意科目に変えられるよう、企画・編集を行った。

改訂第2版でも、編者がよく存じ上げている頭頸部画像診断の第一線でご活躍の先生方に執筆をお願いした。単なる情報や知識の羅列ではなく、臨床に直結する重要な内容が、限られた誌面に凝縮されている。放射線科、耳鼻咽喉科、頭頸部外科、歯科・口腔外科、眼科、脳神経外科、形成外科、研修医、一般臨床医、開業医を主な読者対象としているが、長年頭頸部疾患の診療に従事している先生方にとっても、画像診断の知識の整理に役立つものになったと自負している。また、放射線科や耳鼻咽喉科の専門医試験の準備にも最適な1冊である。

学研メディカル秀潤社 画像診断編集室のご尽力により、初版よりも多くの症例と画像を掲載することができ、大変充実した内容に仕上がった。頭頸部画像診断が多くの人々にとって学びやすいものとなり、本書で得た知識が日々の診療に大いに役立つことを願っている。

2018年9月

酒井 修

◆ 初版の序

「頭頸部画像診断は苦手だ」ということをよく耳にする。頭頸部は耳鼻咽喉科・頭頸部外科、眼科、歯科・口腔外科、脳神経外科、形成外科、内分泌外科などの多くの専門外科によって診療が行われていることからわかるよう、小さな領域ながら非常に複雑な解剖、機能、そして多彩な病理を有し、多くの放射線科医および臨床医にとってこの領域の画像診断を難しく感じさせる原因となっている。一方、「頭頸部では臨床所見、理学所見から診断可能なことが多く、画像診断の役割は大きくないのではないか」というような質問をされることもある。多くは前述したような複雑、難解な解剖を避けるべき、逃げ口上のようなのだが、実際にも、画像によって何がどこまで診断可能か、そしてそれが治療計画にどう影響するかが理解されていないことが、原因のひとつのようである。他の領域にも増して、頭頸部領域で重要なことは単に診断名を当てることではなく、治療方針の決定に必要な情報を得ることで、画像診断を通して患者ケアの向上に寄与することである。

この本は日常よく遭遇する疾患を網羅し、これまでやや難解に感じられていたかもしれない頭頸部画像診断をより身近なものに感じられるよう、そして画像診断で何がどこまでわかるか、どのような疾患でより役に立つかを理解することを目的として書かれている。解剖別の項目に分け、それぞれの領域で撮像方法とポイントとなる正常解剖について述べたのち、代表的疾患の典型的な画像と診断のポイント、画像診断時に知っておくべき知識を記した。使いやすさを考慮し、小児は別項目とし、小児特有な疾患をまとめて記載した。

この本は放射線科および頭頸部診療に携わる診療科の研修医を主な対象として企画されたが、頭頸部診療に携わるすべての人に役立つ本に仕上がったと自負している。頭頸部画像診断の機会がそれほど多くない一般放射線科医、あるいは長年頭頸部領域の診療に携わってきた各専門外科医にとっても、近年の著しい画像診断の進歩を理解し、代表的な疾患の画像所見を整理するのに丁度良いと思われる。日常診療での簡便な参照資料として、専門医試験前の参考書としても使える。

執筆者は、編者が個人的によく存じ上げている頭頸部画像診断の臨床と研究の第一線で活躍している先生方をお願いした。編集にあたっては、最新の知識、情報を含みながらも学術的興味に偏らず、今日からの診療にすぐ役立つよう、注意した。

この本により、一人でも多くの方が頭頸部画像診断を身近に感じ、さらなる診断能力の向上により、画像診断を通し、患者さんに貢献できるよう祈ってやまない。

2002年7月

酒井 修